

マルコ 10 章 46～52 節「わたしに何をしてほしいのか」

この箇所には、イエス様とある目の見えない人との出会いの出来事が記されています。イエス様はその人に「わたしに何をしたいのですか」と尋ねました。そのことによってその人は救いに導かれました。人生が全く変わりました。

1. 出会う前（：46）

イエス様と弟子たちの一行がエリコという町に着き、そしてそこを出て行ったとあります。イエス様はエルサレムに向かっていました。この時は過越の祭りが近づいていました。しかし、単に過越の祭りを祝うためではありませんでした。イエス様にはそこでご自分に待っていることが分かっていました。

45 節。「贖いの代価として、自分のいのちを与える」ということの意味は、過越の祭りのことを考えると分かります。出エジプトの時、過越の子羊のいのちが代わりとなって、イスラエル人は救われました。イエス様が十字架で死なれるのは、過越の子羊のように、「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるため」でした。イエス様の十字架の死によって、その身代わりの死によって多くの人々が救われるためでした。

さて、イエス様がエリコを出て行かれると、バルティマイという人がいました。この人は目が見えず、物乞いをして、道端に座っていました。彼がどのような状態であったのかはある程度想像できます。生きていくために物乞いをするしかありませんでした。どうして自分がこのような状態になったのかと自分の境遇を恨み、行き場のない怒りを抱えていたかもしれません。ですから、この人には文字通り光が見えませんが、心は暗く、これから生きていく先の光を見ることもできなかつたでしょう。

目が見える、見えないは別として、誰でも心が闇で覆われているような、希望の光が見えないような状態になることがあります。そんな中で光が与えられるのでしょうか。希望を持つことができるのでしょうか。目が開かれるのでしょうか。しかし、そこに救い主イエス様が近づいて来られるのです。

2. バルティマイの求め（：47～51）

バルティマイは以前から人々の話の中に出てくるナザレのイエスについて興味を持っていたと思われまふ。特に彼の心を捕らえたのは、イエスが自分のような目の見えない人を見えるようにしたということだったでしょう。バルティマイの中にイエス様に対する期待が膨らんでいたと思います。

なんとそのイエス様が自分の近くを通られることを聞きます。バルティマイはとっさに叫びます。「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」。繰り返し、何度も叫んだのでしょう。周りにいた人々は彼を黙らせようとします。しかし、彼はますます叫んだとあります。

それは周りの状況が見えず、イエス様がどんな反応をなさっているか分からないということもあるでしょうけれども、彼がイエス様のことを「ダビデの子」と呼んでいることが関係していると思われまふ。「ダビデの子」とは旧約聖書に預言されているメシヤ、救い主のことです。そして、「ダビデの子」である救い主が来るときには「目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる」（イザヤ 35：5）と書かれています。バルティマイは、イエス様の噂を聞く中で、イエス様こそ救い主ではないかと思うようになっていたのです。ですから、「ナザレのイエス様」と呼ぶのではなく、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と叫んだのです。救い主イエス様なら自分を救ってくださるという期待があつて、何としてもあわれみをいただきたいと叫び続けたのです。

教会に来始めてまもない方々にお勧めします。主イエス様に憐れみを求めて叫んでください。自分の求め、心の渇きを隠さないうで、救い主イエス様に求めてください。

バルティマイが叫んでいるのを聞いて、イエス様は立ち止まり、「あの人を呼んで来なさい」と言われまふ。イエス様が招いてくださいました。「その人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」とあり、彼の喜びの大きさが分かります。上着を脱ぎ捨てるというのは、羽織っていた上着が邪魔だから脱いだという程度のことではありません。貧しい人は他に持ち物がないうとしても、上着だけは持っていたのです。ですから、バルティマイが上着を脱ぎ捨てるというのは頼りにしていた最後のものも捨てるということなのです。

救い主イエス様に招かれる人は、そのように今まで頼りにしていたもの、いのちを守るようなものさえも捨てて、イエス様について行くようになるのです。

そして、上着を脱ぎ捨てたバルティマイは「躍り上がって」イエス様に近づこうとします。まだ、癒されたわけではありません。それでも、すでに喜んで、躍り上がっているのです。彼のイエス様に対する信頼と期待の大きさが分かります。

イエス様は彼に言います。「わたしに何をしたいのですか」。どうしてイエス様はこのように尋ねたのでしょうか。もちろんイエス様は彼の求めをよく理解しておられたはずですが。その上で、彼の内にある求めを彼自身にはっきりさせて、またイエス様に対する信頼を彼の内に確かにさせてくださったということです。

バルティマイは言います。「先生、目が見えるようにしてください」。他の人に対してはこんなことは言わなかったでしょう。しかし、彼はイエス様に対して真剣に求めています。イエス様にはそれができると信じて求めています。

そして、信頼して求めていることが、イエス様に対する呼びかけのことばにも表されています。ここで「先生」と訳されていることばは、原語では「ラボニ」ということばです。ここでは、バルティマイが実際に呼びかけたことばをそのまま使っているのです。親しみを込めた、尊敬と信頼に満ちた、呼びかけだったのでしょう。

私たちが救い主イエス様に向かう時にも、上辺を飾るのではなく、そのままの自分で向かうことができます。主は私たちのことも呼んでいてくださいます。主が招いてくださるときには、誰でも、これまで頼りにしてきたものを捨てて、自分の殻を脱ぎ捨てて、親しみを込めた信頼によって、主イエス様に救いを求めることができます。救い主イエス様の招きはそのように私たちを変えてくださるのです。

3. 目を開かれて (: 52)

バルティマイの求めに対してイエス様は言われます。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました」。すると、すぐに彼の目に見えるようになりました。奇蹟が行われました。主は目の視力だけを与えたわけではありません。彼が信仰によって救われて、信仰によって生きていくことができるようになされたのです。

「あなたの信仰があなたを救いました」ということを、バルティマイの立派な強い信仰のゆえに彼が救われたと捉えるのは違います。イエス様が彼を招いてくださり、彼の内に求めを明らかにしてくださり、イエス様が彼にみわざを行い、救いを与えてくださったのです。ただ、その救いを受け取るには、彼に信仰が必要でした。その信仰を主は祝福してくださったのです。

聖書は、行いによってではなく信仰によって救われることを強調しています。信仰とは、みことばの約束を感謝して受け取ることです。私たちも、聖書のみことばによって、「キリストについてのことば」を聞いて、主の招きを受けて、信仰を与えられるのです。そして、みことばの約束を感謝して受け取り、救いを与えていただけるのです。

バルティマイが救われたことは、その後のことからもうかがい知ることができます。「彼は見えるようになり、道を進むイエスについて行った」とあります。この後、エルサレムに行き、そこで十字架にかけられたイエス様を見たに違いありません。彼はやがてイエス様の十字架の死の意味を悟ることができたでしょう。霊的にも目が開かれたのです。イエス様は言われました。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました」。主のみことばはその通りに実現します。バルティマイは救われて、主に従い、教会で共に仕えて歩んだはずですが。

誰でも、イエス様の招きを受けて、イエス様のもとに行き、具体的な求めを申し上げるなら、救い主イエス様は、その信仰によって救いを与えてくださいます。具体的な求めにも応えてくださいます。そうして、その人は霊的な目を開かれ、喜んでイエス様の後に従い、信仰によって生きて行くことができます。

主はあなたにも「わたしに何をしたいのですか」と尋ねておられます。あなたの内にある主への求めと信頼を明らかにさせていただいて、それをそのまま主に祈りましょう。

キリストについてのみことばにより信仰が与えられます。霊的な目を開かれ、イエス様の十字架が自分の罪の身代わりであったこと、イエス様の贖いのゆえに新しいいのちに生かされることを受け入れることができます。その救い主イエス様が与えてくださる救いを感謝して受け取りましょう。

「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救いました」と主が背中を押してくださり、罪から解放され、恵みによって生きていくことができます。注がれる恵みを感謝して、分かち合う者とされて、平安の内に生きることができます。そのような幸いな人生を始めたいのです。